

令和4年度自己評価表		白兎のあいうえお		鳥取県立白兎養護学校	
中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて 努力する子どもの育成	あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心		今年度の重点目標	・人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成 ・確かな学びにつながる学習指導の充実 ・児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ・知的障がい教育の専門性の向上・発揮

年度当初						評価結果(9)月		
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成	・地域との連携 ・交流及び共同学習	小学部	○人との関わりやコミュニケーションの広がり、相手に思いを伝えること等を目標として、個々の実態に合わせて日々実践に取り組んでいる。 ○学校(保育園)間交流等、地域との交流活動について、児童の実態に合わせた内容や感染症対策に配慮した取り組み方について検討している。 ○学校周辺の地域にある施設や自然をテーマにした学習や体験活動を積極的に取り組みはじめている。	○授業づくりや指導、支援の方法、環境の設定等を工夫することで、児童同士の間関わりや児童同士が支え合う姿が見られる。 ○児童の実態に合わせた内容やリモート等感染対策等に基づいて、実施の仕方を工夫しながら交流を図っている。 ○学習活動の中に地域に目を向けた教材や体験活動を取り入れて実践を重ねている。	○児童の実態に合わせた人との関わり方やコミュニケーションの捉え方、指導、支援の仕方について、学部研修会を設定する(学期に1回)。 ○学校、保育園と連携を図り、交流の目的や児童の実態を整理し共有した上で、安全に活動できる交流の仕方について検討する。 ○地域の自然や施設、人材を積極的に活用し、地域を題材にした学習機会を1回以上設定する。	○学級内における対教師または児童同士の関わり、コミュニケーションに焦点をあてた目標、活動内容を工夫した取り組みを進めている。学部研修会は、自閉症の児童の対応を中心に、指導支援のあり方について考えるよいきっかけとなった。 ○学校間交流については、本年度前期は、感染症の拡大が続いたため、進めていない。今後は、感染状況を見ながら相手校等と連携して取組をすすめていく。 ○感染対策を行いながら、各学級の実態に合わせて地域の公園や海岸、道の駅などで、校外学習を実施した。実施後に各学級の実態に合わせて、まとめ学習などに取り組んだ。	C	○研修会または、実践の共有等を通して、継続的に児童の実態に合った指導支援について、研究を深めていく。 ○学校間交流のあり方については、学校紹介をリモートで実施する等、できる範囲で工夫する。居住地交流については、感染症対策を徹底した上で、継続して実施する。 ○感染状況を見ながら、地域における学習や体験を重ねる。地域に出かけにくい状況であっても、末恒公民館と連携し、公民館での作品展示や地域の人材活用等、できることを工夫して取り組む。
	・地域との連携 ・交流及び共同学習	中学部	○白兎まつりやにこにこショップ等を通して、人と関わりながら、生徒が一つの目的を持って協力する姿が見られるようになってきた。 ○コロナ禍で活動が制限される中ではあるが、オンライン等で地域とつながるなど学習を広げていく必要がある。	○主体的に関わろうとしたり、自分の思いを表現したりしながら、生徒同士が同じ目標に向かって活動している。 ○地域を知る活動や地域の人との活動を通して、人と関わる楽しさを感じている。	○特別活動の時間や各教科等の学習の中で、生徒が一つの目的を持って協力しながら活動したり、自分の役割を果たしたりできるような学習の機会を学期に1回程度設定する。 ○総合的な学習の時間や各教科等の学習の中で、多様な人と関わる場面や、地域とつながる学習の機会を学期に1回程度設定する。	○生徒同士が関わる活動は、感染症対策により実施に制限があったが、リモート形式で実施したり、少ない人数で活動するなどして、工夫しながら取り組んでいる。 ○地域に関する学習では、。地域の人と関わりは少ないものの、感染対策を行いながら、道の駅や白兎神社などへ出かけた。	C	○引き続き、感染対策を行いながら、意図的計画的に人と関わる活動を工夫していく。 ○今後も機会をとらえて、地域を知る学習を展開していき、地域の公民館で作品展示をしたり、地域の人材を活用したりするなど工夫して取り組む。
	・地域との連携 協働の推進	高等部	○まちづくりワークショップを通して、地域の方と活動する計画を立て、地域での販売活動や清掃活動を実施しているが、コロナ禍で中止になることもある。 ○日々の学習や実習等を通して、卒業後の生活について学年に応じた付けたい力について情報共有に努めているが、十分ではない。	○実態に応じて、地域のために働く姿がみられる ○地域社会での経験をもとに、生徒、保護者が卒業後の生活をイメージしながら進路について考えている。	○地域の教材や人材を活用しながら実態に応じた活動を設定し、地域社会への参加機会を学期に1回以上設定する。生徒が、計画・評価をしながら参画するまちづくりワークショップを実施する。 ○日々の学習や実習を通してできていることや課題を明確にし、自己理解につなげる。懇談等で卒業後のめざす姿を保護者や生徒と一緒に確認することで、目標の共有を図る。「実習の手引き」「進路の手引き」を活用し、情報提供を行う。	○公民館での販売会「白兎よろずや」を1回実施した。また、月に2回の清掃活動を継続して行った。地域の方と畑の草取りやミシンの活動等を一緒に行うよう予定していたが、中止となった。2学期以降に地域の方を講師として招き学習する計画を進めている。「白兎よろずや」や「まちづくりワークショップ」等に向けては教師が計画を進めており、生徒が計画立案する学習にはいたっていない。 ○産業現場等における実習実施後、進路担当者と連携しながら振り返りの会、懇談や学習で進路について考える機会を持った。進路担当者が定期的に「進路手引き」を活用しながら学部会で提案や確認をする機会を持ち、計画的に進路学習につなげている。進路相談会を実施できなかった学年については、資料を配布し情報提供を行った。	C	○公民館への販売活動、地域清掃等は今後も継続する。「白兎よろずや」などの販売会や「まちづくりワークショップ」に向けた学習を実施する中で、生徒が主体的に活動できる場を設定する。 ○今後も相談会や福祉セミナーなどを実施し、卒業後の福祉サービスや就労に関する情報について情報発信していく。感染状況等を見ながら、参観日などの行事を活用して保護者と卒業後の進路について共通理解する場を設定する。
	・病院等との連携	訪問学級	○コロナ感染拡大防止対策として担当の医師、看護師と密に連携ができており、児童生徒が安心安全な状態での学習保障を行っている。教場・ベッドサイドでの学習に対してできることの可能性を模索し、ICT機器の活用を積極的に行っているが、手段に重きを置くのではなく、対人との関わり基礎となる部分を深めていく必要がある。	○児童生徒が安心安全に生活し、安定した状態で学習をしている。 ○対教師との関わりを基盤にして安心して、人や社会とのつながりを楽しみにしている。	○病院関係者と連携し、よい信頼関係を継続できるように努め、その時の環境の中で学習がよりよいものになるように、児童生徒の目標に合った学習について工夫していくために学部会等で共通理解を図る。 ○ICT機器の活用と人との関わり、文化の伝達を広げていくように内容の充実、基礎の力の理解と実践を積み重ねるための研修会を行う。	○病院関係者との信頼関係が築け、日々感染症対策等を相談しながら学習を行うことができています。感染拡大防止対応のための急な授業変更、中止、再開に対応できる体制が必要である。 ○ICT機器の安全な使用と教育的効果について考える機会を持ったことで、安全かつ効果的な活用につながった。人との関わり基礎となる研修会を年度の初めに行った。文化の伝達については、人権教育学習の中で全職員で考えることができた。	B	○感染拡大防止のための急な授業変更に対応できるように、TTの学習時や学部会で児童生徒の実態と学習内容について共通理解し、実践につなげるようにする。 ○引き続き、安全で効果的なICT機器活用ができるように、日々の確認を継続する。ベッドサイド学習については、教材や学習環境、構成の工夫につながるよう実践報告を行う。ICT機器を使いながら、人との関わりが広がるような授業の構成や支援について学部会や学習の打ち合わせで共通理解を図る。
2 確かな学びにつながる学習指導の充実	・新学習指導要領に対応した授業研究 ・ICT機器の活用	小学部	○徹底した実態把握を基に、児童に合った目標設定と授業作り、次の段階を見据えた支援のあり方や評価の仕方について研究を進めている。また、生活単元学習等の合わせた指導について、新学習指導要領の教科の内容を意識して目標設定、授業作りを進めている。 ○教科の学習について、新学習指導要領を基に教材研究や実践を重ねている。	○児童の実態、発達段階に応じた指導、支援を重ねている。生活単元学習等の合わせた指導について、教科の目標や内容意識して計画し、個々の目標につながる授業が展開されている。 ○教科学習(国語、算数)、課題学習の内容、教材の充実が図られている。	○グループ研を通して、実態把握の仕方や教科の内容を意識した目標設定、評価の仕方等について学級の実態に合わせて研究を進める。 ○教科の学習(国語、算数)や課題学習について、学部会で授業づくりと教材の共有化を行う(月に1回程度)。	○学部研では、抽出児の事例を通して実態把握や目標設定について考える機会となった。指導支援の共有とともに授業づくりや支援の改善につなげている。 ○教材を見合う等、学部全体で共有する機会を十分設けることができなかった。学部会等で、日々の実践を無理なく紹介し合える場を設定する必要がある。	C	○今後も学部研、グループ研を通して、児童への指導支援方法や授業改善の方法が共有できるよう継続して取り組む。 ○学部会で、月に1～2学級程度、教材、授業を紹介する機会を設ける。生活単元学習の授業づくりについて、エキスパート教員による研修会を行う。、また、来年度の年間指導計画について見直しを図る。

2 確かな学 びにつな がる学習指導 の充実	・ICT機器の活用 ・新学習指導要領に対応した授業研究	中学部	○生徒が学校図書館やICT機器を積極的に活用し、調べたいことを自分で選び、資料やインターネットでの調べ学習ができてきている。 ○授業改善について、学習グループ等で適宜確認し。主体的・対話的で深い学びを意識しながら授業改善に取り組んでいる。	○生徒が自ら課題を設定し、情報を収集・活用しながら、課題解決したり表現したりしている。	○ICT機器や学校図書館を活用した学習活動の紹介やICT機器の操作や活用方法を学部会や学部研究会を通して共通理解を図る。 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子どもの姿や授業改善の工夫について、学部会で年2回共通理解を図る。	○調べ学習で、ICT機器や学校図書館を活用することの機会が増えてきて、生徒自身が進んで活用使用する姿が見られてきている。 ○職員間で、ICT機器のより良い活用方法について情報交換をするなど、意識の向上が見られる。また、担当者から活用方法について職員へ周知する機会も増えてきている。	C	○実践例を紹介したり、教材を蓄積したりしていくことで、学部職員で、全員で使えるようにしていく。 ○情報交換の機会を設定し、共通理解を図るとともにより良い活用ができるようにする。
	・新学習指導要領に対応した授業研究 ・ICT機器の活用	高等部	○新学習指導要領をもとに教科を意識しながら年間指導計画の見直しを行い、内容を整理した。個別の指導計画を関連付けながら授業づくりをおこなっている。 ○単一障がい学級では、「情報」を選択制で履修していた為に、生徒によってICT機器を活用した情報活用能力に差がある。	○個別の指導計画と年間指導計画を関連付けながら授業づくりが行われることで、生徒が生き生きと活動する姿が見られている。 ○単一障がい学級の生徒が情報機器の使い方に慣れ、情報収集や活用している姿が見られる。	○グループ研究を活用して、複数の教員で実態把握を行い、単元計画をもとに、個の目標や支援について事前共通理解を図りながら実践する。単元ごとに、年間指導計画を修正し、次年度に生かせるようにする。 ○「情報」を必修とし、1人一端末を活用しながら、学習を行う。クラスルームや、Googlefoamを繰り返し活用する。情報モラル教育についても外部と連携しながら行う。	○グループ研究を活用して話し合いをしたり、授業担当者で話し合いを行ったが、全ての教科で単元計画を元に、目標や手立ての共有をしながら実施することは難しかった。グループ学習は個別の指導計画の教科の目標を共有し合いながら進めることを心がけた。年間指導計画と個別の指導計画との関連について課題が見えてきた段階である。 ○「情報」を必修としたことで、計画的に外部機関と連携しながら情報モラル学習にも取り組めた。生徒1人一端末にはなっていないため、パソコンを中心に学習を進めた。	C	○職員同士で話し合いができるよう時間の確保に努める。職員で、年間指導計画で取り扱う各教科の内容について見直しをおこない、共通理解することで、次年度の個別の指導計画の目標検討時に学習指導要領と関連づけた目標作成できるようにする。 ○配布される教員用タブレットを活用し、生徒端末の充実を図る。年間指導計画に沿った学習を今後も継続して行う。
	・つながりと活用に向けた書き物の整理	教務部	○目標・評価、実態把握、記録、引き継ぎ資料など年間を通じて、児童生徒にかかわる様々な書き物がある。しかし、その評価や記録が上手くつながっておらず、活用にくさが課題である。	○「児童生徒に係る書き物 一覧表」が周知・活用され、児童生徒の様子について検索しやすくなっている。 ○書き物が目標設定のよりどころ、児童生徒理解や日々の支援につながるものになっている。	○「児童生徒に係る書き物 一覧表」を赤ファイルに加え、その都度周知を図る。 ○既存の記録や評価のつながりを検証し、どうつなげたら分かりやすかつ使いやすくなるのか、学部や他分掌の意見も取り入れながら検討していく。	○職員会・学部会等で書き物について提案や確認をする際に、「児童生徒に係る書き物 一覧表」を活用することで、全体像が見えやすくなったという点においては効果があった。 ○業務改善に関するアンケート結果より、個別の教育支援計画や個別の指導計画、評価等について、各学部における具体的な活用のしにくさや改善案等が見えてきた。	C	○児童生徒に係る書き物について職員全体により周知が進むよう、各分掌からも声かけ等を行い、周知や検討を促していく。 ○アンケートの結果をもとに個別の教育支援計画や個別の指導計画、評価等について、観点を絞って整理し、先を見据えた具体的な改善案を検討・立案する。
	・情報活用能力の育成	情報教育部	○小グループでのリモート学習が浸透しつつある。教員のICT活用スキルの向上、重度重複障がい児童生徒のICT活用、単一障がい学級の一斉指導におけるICT活用が課題である。 ○司書教諭と学部図書館担当、学校司書が連携し、各学部での学習や読書活動における図書館の利活用が進んできている。より多くの先生に図書館を活用してもらうために、児童生徒の多様な実態に応じた効果的な資料や図書館の利活用事例についての情報発信を継続して行う必要がある。	○教員はオンライン(GoogleMeet)を活用した学習指導の方法がわかり、活用している。Google Workspaceを活用した学習が単一障がい学級を中心に行われている。児童生徒の実態に合ったアプリケーションや情報機器の活用が、重複障がい学級を中心に進んでいる。 ○図書館や図書館資料、司書教諭や学校司書を活用した教材研究や授業がなされている。(学習を担当する教員の9割が図書館を利活用している。)	○ICTサポート事業を活用しながら、児童生徒への情報教育や教職員研修を進める。教員のICT活用スキルの向上と児童生徒の効果的なICT活用のために校内巡回・ICT活用相談を全学部で実施する。 ○図書館や図書館資料を活用した学習の提案やイベントの企画をする。(図書館オリエンテーション、おはなし会、図書館まつりなど) ○図書館の資料や利活用事例について情報を発信する。(図書館だより、ノーツ掲示板、図書館前掲示板など) ○図書館への要望を聞く機会を作る。(職員図書購入希望アンケート、図書館利用アンケートなど)	○ICTサポート支援員の協力を得て、在宅でも受講できるGoogle Workspaceの研修動画を作成し、本校の教職員全員が入ったクラスルームを活用して周知・受講できた。 ○高等部単一学級では、ICT支援員の授業サポートを得てモラル指導を行った。その他の学部、学級ではICT支援員による教員への助言(タブレット活用やアプリケーション等)を受けることが9月までに6回できた。 ○リモート会議等の運営・実施の負担軽減や業務改善につながるよう、全教職員が入ったクラスルームで職員会等を実施した。教師はクラスルームを使って、学習に関する資料や動画を共有したり、授業で活用したりすることができてきている。 ○新着本を掲示板で紹介したり、季節や学習に合わせた本の特別コーナーを作ったりして教職員が目的に合った資料を探しやすい工夫している。 ○図書館だよりを中心に各学部で図書館を活用して実施した学習の様子を紹介している。 ○職員図書購入に際してフォームを使って希望アンケートを実施した。対象教員の約70%の回答を得ることができ、どのような本が求められているかを知ることができた。	B	○Google workspaceの機能を使ったフォームの作成やクラスルームに生徒を入れる作業など、スキルのある教員に作業が絞られ、結果的に全体の作業量や負担が減っても、一部の教員の負担は著しく増えているため、ICTスキルの高い教職員を分掌を中心に育てていく必要がある。 ○教員のICT活用スキルが向上するよう、継続して情報教育部がサポートしたり、ICT支援員につないで、助言を受けられるようにしたりする。活用事例を増やし、共有していくことが必要である。 ○引き続き図書館活用についての情報提供を行うとともに、資料や学習の相談に対して、児童生徒の情報活用能力を身につけるための図書館や資料の利用の仕方について具体的に提案していきたい。
3 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進	・新学習指導要領に対応した授業研究	研究部	○目標設定や評価のあり方について困り感を持っている教員が多い。	○児童生徒の実態の捉え方がわかり、目標設定がしやすくなっている。	○様々な観点で児童生徒について話し合い、目標や評価について考えることができるよう、事例検討を中心としたグループ研を行う。	○事例をもとに話し合う中で、児童生徒の課題や今後の学習内容について捉えやすくなった。児童生徒の姿から目標を設定するための話し合いがなされている途中である。	C	○学習指導要領や年間指導計画と学習のねらいを照らし合わせながら話し合えるよう、グループ研の進め方やワークシートの工夫をする。
	・健康教育の充実 ・防災・安全教育の推進	全学部	○感染症の状況(県教委のガイドライン等)に合わせて児童生徒、教職員ともに感染拡大防止に取り組んでいる。 ○日々の健康保持や防災への意識、日常生活における安全の意識について、避難訓練や日々の日常生活の指導等で繰り返し学習する機会をもっている。	○感染症対策を徹底した上で、授業や活動の仕方を工夫しながら取り組んでいる。 ○各学部の実態に合わせて健康安全教育の取り組みの充実を図り、児童生徒自身が自らの健康や防災について意識した態度や行動が見られる。	○児童生徒の実態と感染の状況や県のガイドラインに合わせて、適宜本校の行動の判断基準等を更新し、感染症対策をとりながら安全に学校生活を過ごすための工夫を行う。 ○児童生徒が健康、安全を意識するための指導、支援の工夫について各学部で実践の共有や研究を進める。	○県のガイドラインの方針に沿って、その都度職員で確認し、感染症対策を行いながら学習を行った。 ○生活単元学習の時間を使って、災害時の対応について学習に取り組んだが、充分とはいえない。また、学部間で共有をすることは充分にできていない。	B C	○感染症対策に対して、生徒は意識しながら学習できている。今後も感染症対策を講じながら学習を実施する。 ○災害に対して、実態に応じた学習を今後も設定する。年間指導計画に位置づけできるように見直しを行う。
	・防災・安全教育の推進	健康・安全部	○火災や地震を想定した避難訓練や交通安全教室を毎年実施することで、児童生徒及び教職員に対して「自分の命は自分で守る」学習や指導についての意識が向上しつつあるが、環境や食育の分野においても意識の向上を図っていく必要がある。	○各種避難訓練を通して、防災や減災について学ぼうとする児童生徒の育成を図るとともに、教職員の危機管理意識が向上している。 ○TEASの取り組みを中心に環境への意識が向上している。	○保健、食育、安全、環境の各分野から児童生徒への学習指導ができるように、教職員に対して掲示板等を通じて情報発信し、理解啓発を行うとともに、各種研修、訓練を通して教職員の危機管理意識の向上を図る。	○交通安全教室や避難訓練を通して、児童生徒個々の実態に即した「命を守る」学習を実施した。不審者対応研修は、感染症拡大防止のため、ビデオ研修という形で実施した。多くの職員から、様々な意見や改善のアイデアなどがアンケートにあがっており、教職員の危機管理意識の向上を図ることができた。 ○各学部、学級において、ゴミの分別や使用していない教室の消灯・エアコンの未稼働など、TEASの取り組みに即した指導・活動が増えてきている。	B	○避難訓練や研修等の振り返りから、改善点を洗い出し、分掌会、運営委員会を通して現状に沿った研修会・訓練となるように変更する。 ○掲示板等を通して、環境教育や食育に関して情報発信を行い、教職員の意識向上と共通理解を図っていく。環境委員会の活動を中心に児童生徒のTEASへの関心を高めていく。
	・チームで取り組む支援	小学部	○学級担任だけが課題を抱え込まないよう、学部会等で児童の実態、状況について共通理解し、学部全体で共有して指導にあたる意識を持ちつつある。	○児童の実態、状況について学部全体で情報共有が行われ、学部全体で児童を見ていく意識、一貫した指導しようとする意識が高まっている。	○上・下学年会(月1回程度)の充実と報告、連絡、相談の流れを徹底することで児童の気になる状況の早期発見に努める。 ○支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当との連携を密に図る。	○学部全体で共通理解が必要な児童の実態と支援について、職朝や学部会等の機会を捉えて共有している。上・下学年会は、定期的開催できておらず、担任の困り感や気になる児童を即時把握するための環境を整える必要がある。 ○支援部、SSW等と密に連携を図り、ケース会の設定や外部との連携などに努めている。	C	○上・下学年会を計画的に設定して実施する。情報共有シートの活用も行う。 ○継続して、ケース会を持ち、早期対応をする。対応策を話し合った後日に、実施の確認、成果や振り返りを行う会も設定する。
4 知的障								

4 知的障がい教育の専門性の向上・発揮	・チームで取り組む支援	中学部	○生徒の行動の背景や内面を大切に生徒理解をもとに、共通した方法で生徒の指導に当たり、チームで取り組むことを継続していく必要がある。 ○進路について見通しを持って、安心して進めることができるよう、教職員が理解し、保護者へ情報提供していく必要がある。	○校内外の関係者と迅速に情報共有が行われ、指導・支援に生かされている。 ○生徒や保護者の夢や希望、思いや困り感に寄り添い、一緒に進路について考えている。	○具体的な指導・支援方法について、校内(支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当)及び外部の関係諸機関との連携を密に図る。 ○行動の背景にある生徒一人一人の「憧れ、願い、思い」を大切に生徒理解に努める。 ○進路について見通しを持って安心して進めることができるよう、教職員が理解し、保護者へ情報提供する機会を設定する。	○少ない時間の中でも話し合いの時間を設け、情報を共有するなど連携を図っている。 ○校内(支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当)及び外部の関係諸機関と密に連携を図り、指導・支援に当たることができている。 ○進路について共通理解を図る時間の設定が難しかったが、保護者の思いを聞き取り、寄り添う姿勢で、進路について取り組んでいる。	B	○引き続き、具体的な指導・支援について、教員同士の密に連携を取り合いながら取り組むとともに、校内(支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当)及び外部の関係諸機関とも連携して取り組む。 ○進路指導主事やキャリア担当による進路についての研修の機会を設ける。また、教員同士の情報交換の機会を設る。
	・チームで取り組む支援	高等部	○学級・学年だけで指導支援するのではなく、SSWやSC、進路担当など校内資源につなげる体制が整ってきている。方針についてその都度、情報共有する時間がうまく取れていない実態がある。	○気になる事案に対して、気になる児童生徒早期発見のための教師の視点(チェックシート)等を活用して情報を集め、学部内で情報共有することで、役割分担しながら指導・支援が素早く行われる。	○職朝、主任会、学部会等で生徒の情報を共有するとともに、連絡、相談し合う体制を構築し、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたるようにする。 ○生徒指導主事と進路担当が支援部と連携しながら、校内支援を分担し、ケース会等でニーズに応じた指導支援が実践できるようにする。	○必要に応じてケース会を実施し、支援について共通理解を図りながら取り組んでいる。報告であげていくべき内容については、個人によってばらつきが見られるため、何を共有すべきかを確認する必要がある。また、学年内では十分に共有できたが、学部内で共有がが遅くなることがあった。支援部と相談し、事案ごとの役割分担に沿って進めるが、役割分担が曖昧になっている部分がある。	B	○情報収集したことについて、報告先と内容、資料としてのまとめ方、活用方法について、学年主任、学部主事、コーディネーター、生徒指導で再度確認する。今後も随時学部内で必要な情報を共有するように努める。
	児童生徒の実態に適したチームでの授業作り	訪問学級	○日々の情報交換、学習計画の話し合い等で児童生徒の表出の変化や実態に適した環境、教材、学習内容を工夫することができ、児童生徒の自分らしい表出が見られている。児童生徒数の減少と感染症対策により訪問学級の全職員で個々の児童生徒の実態を理解し、適した支援を行っていく必要がある。	○児童生徒の個々の表出について理解し、表出を促す授業作りができている。	○教員一人が1回以上授業の様子を動画に記録し、定期的に視聴し、意見を交換する中で、児童生徒理解、支援のあり方、教材研究、目標と評価等の視点について深めていく。	○情報交換や授業実践を通した児童生徒理解を深める研修により、子ども像を探ったり、支援について考えたりできつつある。児童生徒の表出を促す支援を理解するために、職員で授業の動画視聴を3回行なった。児童生徒の表情やつぶやき、身体の動きを考察することで授業に関わっていない職員もイメージを持つことができた。	C	○研究日以外にも研修の機会を定期的に設定し、動画の視聴等を通して、児童生徒全員について表出のあり方を語り合うようにする。日々の学習の中でのTTの役割を確認たり、交代したりしながら、様々な状況に備えるようにする。 ○研究日の中で自立活動の流れ図について研修を深め、個別の指導計画の目標や評価に生かせるようにする。今年度の評価について授業者と担任との共通理解の機会を設定し次年度の目標設定へつなげられるようにする。
	・チームで取り組む支援	研究部	○コロナ禍で県外研修等が少なく、新しい情報に触れる機会が限られている。 ○昨年度の「一人一実践」の取り組みを通して、主体的に研究に参画しようとする教員が増えている。	○それぞれの教員が専門性を高め、学んだことを児童生徒の支援や学習に生かしている。 ○児童生徒の支援や目標設定について、小グループで活発に意見交換がなされている。	○15分研修を含めた校内研修で、特別支援教育に関する新しい情報や、日々の授業づくりに役立つ情報を定期的に提供する。 ○誰もが意見を出しやすいよう、各学部と連携してグループを編成し、毎月のグループ研の進め方をワークシート形式で提示する等の工夫をする。	○15分研修の内容が児童生徒との関わりや授業づくりに役立つよう努力しているが、参加者が少なく、研修内容が日々の取り組みに十分生かされているとはいづらい。 ○学部別の小グループで取り組むことで、児童生徒や学習について意見を出しやすい雰囲気ができている。	C	○職員室や教室等からリモート参加できるよう、Classroomを活用した研修形態を工夫する。 ○引き続き活発な話し合いがなされるよう、ワークシートの形式等について意見を聞く機会を設ける。
	校内支援の充実	支援部	○生徒指導の問題や家庭に関わる問題等、各学部内の相談体制と支援部の連携が迅速に行われ、それぞれの相談に対応でき始めている。キャリア教育(カウンセリング、外部専門家相談、進路)では、校内教育相談の内容と関連づけた実施が進んでいる。キャリア教育の視点での切れ目のない支援や連携体制を整えるための方向性が見え始めたところである。	○生徒指導とキャリア教育と教育相談の連携体制が整い、児童生徒一人一人の自立と社会参加につながるような校内支援体制の整備が進んでいる。	○生徒指導、キャリア教育、教育相談の担当が連携体制を取ることができるようスクリーニング会議のあり方を見直す。会議ではより充実した支援体制を整えるために各学部の情報を共有し、それぞれの役割を明確にして対応を進める。 ○「進路の手引き」(教職員用)の活用を進めるとともに、保護者用を作成する。各学部の進路学習につながる情報やニーズに合った発信方法を検討する。	○スクリーニング会議の前に生徒指導主事・キャリア教育主任・教育相談主任・SSWで情報を収集する時間を持つことで共通理解が図りやすくなった。スクリーニング会議では情報を出すだけで終わらないようにする必要がある。 ○「進路の手引き」(保護者用)の作成途中である。職場研修や進路研修は集合の形ではなく、掲示板や資料配布として実施したが、理解啓発に難しさを感じる。	C	○スクリーニング会議で出された情報について次の会議までにその後の様子や対応等を確認するようにする。 ○「進路の手引き」(保護者用)を完成させるとともに、各学部の進路担当で進路学習に関する情報交換を行い、「進路の手引き」(教職員用)の活用や保護者・先生方のニーズに合った情報発信の方法を考える。
	センター的機能の発揮		○校外への教育相談や通級指導等で支援体制は確立してきている。校内資源を活用した校外支援を実施したいが、実際には行う体制になっていない。	○校内資源を活用した校外支援体制の活用を始める。	○校内資源の情報を収集しながら人材を把握し教育相談に活用する。それを支援部だよりを使って情報発信する。	○特別支援研修会では校内のエキスパート教員や通級指導の経験がある教員などにアドバイザーとして参加する計画を立て、実施した。また、夏季休業中の校外教育相談をエキスパート教員がリモートで参加し、実施した。	B	○後期も校内資源を活用した校外の教育相談を実施するために、相談の形態や相談時間帯などを検討する。
5 業務改善の取組		全学部	○職員の入れ替わりが多く、児童生徒に係る個人情報を含む文書等の取り扱いについて、細かい部分まで共通理解したうえで業務をスタートするまでに至っていない。	○一人一人が、日々の業務の中で、重要な個人情報を含む書類等を扱っていることを常に意識し、落ち着いた状態で文書を扱っている。	○個人情報を含む文書の取り扱い等について常に意識できるようにチェックリストを使って点検する。 ○文書管理のルールを見える化し、全員で徹底する。	○個人情報を取り扱う時は「ダブルチェックを」と声に出して確認することや、誤配付につながりがちなプリントアウトの取り忘れがあった際も、全体で確認するような姿が見られるようになってきた。 ○文書管理のルール化、見える化が進んでいない。	C	○実施の状況や意識の継続ができているかなど、振り返る機会を持つ。

評価基準
 A: 十分達成 [100%]
 B: 概ね達成 [80%程度]
 C: 変化の兆し [60%程度]
 D: まだ不十分 [40%程度]
 E: 目標・方策の見直し [30%以下]